

巻頭言 「君の青春の日のようであるように」

宇野 元

カール・バルト 82 年の生涯の、最後の日の記録があります。その日、彼は講演の原稿づくりをしていました。夜には、トゥルナイゼンと電話でおしゃべりしています。冷戦下の暗い状況について意見を交わした後、彼は快活にしめくくります。しょんぼりしちゃいけない。治められているからね。翌朝、彼が亡くなっているのを妻が発見しました。夫が一日の最初に喜んで聴くモーツァルトのレコードをかけにきたときに、机の上に、途切れた文章が残されていました。それはこういう言葉でした。信仰によって先に歩んだ人たちの言葉に、つねに耳を傾けることが大切だ。なぜなら、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神であるのだから。」「彼らはみな、神にたいして生きている。使徒たち、そして一昨日の、また昨日の父祖たちに至るまで。」

牧師時代に発表した『ロマ書』をはじめとして、彼はキリスト教会の他のどの教師よりも多くのテキストを残しました。と同時に、最後まで精力的に書きつづけました。この点でもくらべられる存在がありません。バルトの読者は、人生の四季を同伴してくれる教師をもちます。これは得難い贈りものです。

彼は、私たちもいきいきと生きるよう励ましてくれます。

『教会教義学』(Ⅲ, 2) のはじめに、一緒に年を重ねるトゥルナイゼンの名前と、次の言葉が記されています。

君の老年が、君の青春の日のようであるように！

この言葉は、聖書の言葉をそのまま借りたものです。「あなたの老年が、あなたの青春の日のようであるように！」(ルター訳ドイツ語聖書申命記 33, 25)。いくつになっても、青春の日のようである恵みが与えられている、実際にそうあるように、と力強く招かれます。神は私たちが生きるために御子をお送りくださり、新しい創造のみわざの中に置いてくださっています。地上の歩みに限りがあることを心に留めつつ、素晴らしい将来を望んで毎日を生きていくことは、明るい初々しさをいただいて生きることです。そしてそのように生きる姿は、まわりの人々に、イエス・キリストにあることの幸いを証しするものとなるでしょう。